平成２年度

カウンセラー研修員として学んだこと

川崎市総合教育センター カウンセラー研修員

川崎市総合教育センター研究紀要　4：285－288.　1991

カウンセラー研修員として学んだこと

時　田　正　史

はじめに

「教育相談」あるいは「カウンセリング」という言葉について，ある種の偏見を持つ学校現場の教師は少なからず存在する。教育相談と聞くと，「傾聴・受容・共感・支持，ハイハイと相手（生徒や父母）の言うことをただ聞くばかりの甘やかしだ」ということで一面的に捉えられている現状が確かにある。

私は，５年前に川崎市教育委員会主催の教育相談宿泊研修会（２泊３日）に参加し，単なる言葉としてでなく教育相談の根本の考え方といったものにこの時初めて触れたといってよい。その後，生徒指導担当教諭という立場から教育相談に関する講義・演習等の機会を何度か持つことができた。経験としては断片的で浅いものであったと思うが，それらは今回総合教育センターのカウンセラー研修員として業務に関わる際のハシゴとして多少なりとも役に立った気がしている。

普通の場合，現場教師にとっては，教育相談について十分な時間をかけて理解することができるという機会は必ずしも多くはないと思われる。また，たとえ機会は与えられたとしても頭から"教育アレルギー"を起こしている現場教師も一部とはいえ確実に存在するように思う。

そのような諸々の事情の中で，概して学校現場においては教育相談を一種特別なものとして捉える傾向 ― 過大な評価，あるいは極端な過小評価 ― が強いように感じられる。

この１年間，専門機関としてのセンター教育相談室と学校現場の両方に関わりながら少しずつではあるが見えてきたこと，気がついたこと，心に残ったことを雑駁ながらまとめてみたい。

主な観点として，次のような事柄をめぐって考えてみた。

- 現場教師から見た「センター観」について
- 教育現場での生徒理解や生徒指導の中で生かせるセンター教育相談室の方法，考え方，態度について
- カウンセリングそのものの厳しさ，カウンセラーとしての資質等の問題に関して
- 教育相談や教育相談的関わりについて，これを学校現場で生かす工夫，ヒントについて
- 学校と相談室の連携は可能か，またどのような部分で可能か，等の事柄に関して

1.　学校現場からみたセンター相談室について

私自身そうであったように，現場教師の多くはセンターの教育相談室についてそのシステムをはじめとしてメンバー構成等に関しても，漠然とした知識しか持ち合わせていない。また相談室に於いて実際の来談者への面接がどのように行われるかについても，真に理解している現場教師はそう多くはない。

一方で学校はセンターの教育相談活動に対して，かなり多くのものを期待している状況があると思う。そして，「いつでもセンターの情報は学校が依頼すれば自由に収集できるものだ」との認識

に立っている教師も意外に多いのではないかと思われる。ところが，センター第４研究室における少なくとも「教育相談活動」の部分については，他のほとんどの分野と異なりその性質上個人の秘密厳守という絶対の壁がある。このような事情から，学校とセンターの連携が常に可能であるという訳には行かないことが，現場に於いて完全には理解されていない。

生徒指導担当教諭という立場にある私自身このことを，今回の研修を通してあらためて実感した。学校は警察，家裁，児相等々の諸機関と色々な面で互いに連絡をとり合うケースが多く，センター相談室についてもこの延長線上のものとして捉えがちであり，学校現場にとってある意味で最も身近な存在でありながら，最もわかっていなかったのがセンターの相談活動であったようだ。

2. 生徒理解や生徒指導に生かせる相談室の方法・考え方について

—主に「受理会議」，「事例会議」の中で気づいた事柄から—

毎週１回の受理会議，月１回の事例会議の中で得たものは大きかった。「人間そのもの」へのあくなき関心，忍耐強さ，鋭い分析，自由な視点・多様な立場からの討論，適切なスーパーバイザーの助言，と非常に参考になることばかりであった。

その中でも学校現場で生徒や父母に関わる際，あるいは校内で行われる「事例研究」の際にも直接・間接に生かせると思われる部分について，学校の実情と対比しながら，感じたことを列挙してみたい。

●受理会議において数多くの初回面接の報告をし合う中で，各人が父母や子どもに関する情報を非常に大切にしていることをあらためて知った。また，その情報を豊富な経験と専門知識を持って分析し，仮説を立て，根本問題の解決の方向をさぐっていた。

→学校においては，ある意味で子どもに関する情報は入手し易い状況にあると思えるが，余りにも情報が数多くあり，しかも容易に手に入るためかえって情報分析に客観性や冷静さを欠いたり，粗末に扱ったり，見落したりすることも少なくないのではないかと反省させられた。

●受理面接の際の観察眼の鋭さには驚かされた。受付での様子，服装，言葉づかい，話し方，表情，その他あらゆる仕草の中から「人間」を読み取ろうとする徹底した姿勢と繊細な神経を感じた。一方でまた，眼に見える「現象」にふり回されず，「現象」の裏にある事柄（根本原因）—生育歴，家庭環境，家族関係— に迫っていく姿勢は大変参考になった。

→校内の「事例研究」や生徒指導に関する教師間の情報交換等においては，どうしてもある一定の時間内（少なくとも学年単位，あるいは卒業までには，といった）での解決を目指しがちで，「現象」そのものに眼を奪われ，その結果，問題処理を急ぐといった傾向に陥る。

●継続相談の担当が決まると，担当者以外は当該クライエントに対して待合室で挨拶を交わすことすらも原則としては良くない，ということが４月当初の受理会議の際，相談活動に関する様々な確認の話し合いの中で出てきた。これには本当に驚かされた。また，来談者に対して無闇に（不用意に）明るく元気のよい初対面の挨拶をするなどのことは時としてマイナスに作用する，などという話もでてきた。ここでは，相談室の「非日常性」—担当者とクライエントの人間関係をなによりも大切にする姿勢— を強く感じた。

→これは学校現場の状況とまったくと言ってよいほど相反する内容である。教師同志が連携を取り合い，一人一人の個性に応じてそれぞれの方向で多面的に生徒個々にアプローチしていく，これは教師にしかできない関わり方であり，ここには「日常」そのものがある。

3. カウンセリングの厳しさについて

いわば「非日常性」を基盤としているカウンセリングそのものは，その原則においても具体的技法等においても，ある種驚きと新しい発見の連続であった。

以下，教育相談実習コースの中の特に「ロールプレイ」や「ミニカウンセリング」で気付いたこと，実際の相談ケースを担当していく中で感じたことについて，ふり返ってみたい。

［ミニカウンセリング］

カウンセリングは他者を支える，あるいは援助していくための会話であり，日常の社交会話は相互に会話そのものをエンジョイするための会話である。つまり，両者は全く異なるルールの上にある，ということを明確に理解しないままミニカウンセリングに入ったためいろいろな欠陥が目だった。

面接のテープを聞き直してみると，いかに自分が面接中に相手の言ったことに気づかずにいるか，とんちんかんな応答をしているかに愕然とした。相手の訴えたい内容を時にはねじ曲げ，全く別の方向に話題がそれているといった場面が多々現れる。 ― いかに生徒の気持ちに即した形で聞いたり，理解したりしていないかを思い知らされる。

相手に対する全面的な支持の姿勢を示すため，あるいは相手に考えを整理させるための「繰り返し」であるが，単に相手の言ったことをそのまま繰り返すだけでも大変なことで，できたとしてもいかにもカウンセリング調であり，対話としてのごく自然な流れの上に乗ってはいないという感じを受けた。― 練習不足。

［相談ケース］

新参のカウンセラー研修員が，年度当初から実際の相談ケースを担当しない理由はおよそ次のようなことからである。

『……教育相談の中でも心理療法的な分野はそれなりの理論や方法や技法を有した人が行わないと，相手に心的外傷を与える率が高まる。……カウンセリング研修やカウンセリング臨床の経験皆無な新規スタッフに対しては特訓でよいから体系的にカウンセリング教育を受けてもらうことである。それがすむまではクライエントを直接担当しない方が礼にかなっている。でないとバリカンを扱ったことのない人間が客を虎刈りにするようなものである』（国分康孝「学校カウンセリングの基本問題」）

11月，初めて実際の受理面接の機会を持つことになった。教育現場で学級担任として10年以上，生徒指導担当として５年，その間数えきれないほど多くの父母や生徒と接してきていながら，この時ほど緊張したことはなかったと記憶している。

果たして演習等で学んだ徹底した「傾聴，支持，共感の姿勢」，ポイントをつかんだ「繰り返し」はできるか，また受理面接であるだけに必要な情報を自然な形で，しかも時間内に適切に得ることができるか等々不安はあったものの，ともかく来談者の気持ちに沿って聞くということに何より主眼を置くことにして面接に臨んだ。

正直なところ最も気にかかったことは次回この来談者が果たして来てくれるであろうか，ということであった。幸いその後も継続して相談は続いている。

― ともすれば効率が優先されるような忙しい時代であり，教育現場でもその風潮がある中で生徒や父母の話を納得がいくまで「徹底的に聴く」場面は益々少なくなっていると感じる。説明した

り説得したり，指示を与えたりが学校現場で必要な場面は多く，また教師にとってそれらはどちらかというと得意の分野でもある。

しかし，教師も教師である前に１個の人間であるわけで，時にその人間が人間（生徒）の言うことに「耳を傾ける」という姿勢を持つことの大切さを実感する。

結局，「聞く耳持たない」とは相手に「関心がない」ということになろうか。

4. 私自身の今後の方向　むすびにかえて

『……カウンセリングでも一般の日常生活での対人関係でも，誰かを支えたり助けたり励まそうとする場合には，ただ無闇に「頑張りなさい」とか「……して下さい」とか言うだけでは大して効果はありません。それどころか，かえって相手の反感や反発をかうことも少なくないでしょう。従って「人間関係」の理論にかなった効果的なコミュニケーションが必要です。』（武田健「カウンセラー入門」）

上記の内容が今素直に，合理性をもって受け入れられる。このことは例えばミニカウンセリングの中で，自分自身がクライエント役を演じることによっても確められた。「どうした，頑張れ」，「このようにしたらどうか」 ― これが真実励ましやプラスのサジェスチョンになり得る対象（生徒）も多く，見極めはむずかしいのだが ― という類のワンパターンの繰り返しによる弊害については是非心にとめておきたい。

現場教師の声として「登校拒否生徒等の対応の場合にはともかく，所謂"反社会的問題行動"を繰り返す"手に負えない"レベルの"問題生徒"への対応としてはカウンセリングなどはその効果が非常に疑問である」との意見は根強い。

これに対しても，おぼろげながら自分なりの答えが見えてきたような気がする。

『人は自分をわかってくれようと努める相手に対しては敵対感・防禦性を持たないで，自らが自らの行動を変容しようとするものである。例えばあるとき裁判所からひとりの非行少年がＴ氏のところへまわされてきた。少年は来たくて来たわけではないので黙って約20分間椅子にすわっていた。Ｔ先生はそこで「君，退屈でしょうねぇ」といった。少年は「ハハハ……」と笑ったあと，また残りの20分を沈黙していた。やがて面接時間が切れたのでＴ先生はそこで少年と別れた。やがて少年の母親がやってきて「先生が何かいい話をして下さったらしく，うちの息子がよくなってきた」と挨拶した。何故これだけの面接で少年は変わったのであろうか。

多分この少年が事件を起こすと周りの人達が「ああじろ，こうしろ」と今までは指示していたにちがいない。ところがＴ先生は黙っている少年に「何か話せ」とはいわなかった。「君，退屈でしょうねぇ」と少年の気持ちをよくわかってやった。そこで少年にすれば「この世の中に俺の気持ちのわかる人がひとりでもいることを知って俺は満足した」と感じ，これが非行から足を洗うきっかけになったと解釈できる。それ故，「なおそうとするな。わかろうとせよ。」というのである』（国分康孝，米山正信「学校カウンセリング」）

この１年間は新鮮な驚きと発見の連続であり，私などの全く知らなかった別世界を覗いたという感が深い。第４研究室でお世話になったすべての方々に心からお礼を申しあげたい。

・指導助言者

川崎市総合教育センター第四研究室指導主事　松井恭子